

『日はまた昇る』における writing と respectability

語りの homosociality から照射して

田村 恵理¹

要 旨

本論は、Eve Kosofsky Sedgwick の提唱する homosocial の概念を用い、Ernest Hemingway の小説 *The Sun Also Rises* (1926) に現れる書く事に対する意識を考察する。まず *The Sun Also Rises* の物語に描かれる人間関係と語りの形式に homosocial な特徴がみられる事を指摘する。次にこの物語の主人公 Jake の情熱が homosocial 概念の三角構造を成していると主張し、この物語が「語り得ない情熱という respectable に位置づけされた物を、書く事という disrespectable に位置づけされた芸術形式で表現する事を望む作家の意識」を浮き上がらせている事を示す。最後に、この物語にみられる「Jake が二人の男女に向ける情熱の三角構造」から「Jake の書く行為にまつわる情熱の三角構造」を考察する。

キーワード：Ernest Hemingway, Eve Kosofsky Sedgwick, homosocial, *The Sun Also Rises*

1. はじめに

本研究は、Ernest Hemingway の *The Sun Also Rises* (以下 *The Sun* と表記) について、テキストの持つ homosocial な性質に注目し、Hemingway が書くという表象行為に関して示す姿勢を考察する。本論が依拠することになる Eve Kosofsky Sedgwick の提唱する homosocial な愛の構造について、始めに示しておく。Sedgwick (1985) は、男同士の絆を分析する *Between Men* の第1章において erotic triangle の図式について説明し、特にひとりの女性をめぐるふたりの男性の競争にスポットを当てる。そして第2章において Shakespeare のソネット集における男女の erotic triangle の関係を以下のように解釈している。

I am saying that within the world sketched in these sonnets, there is not an equal opposition or a choice posited between two such institutions as homosexuality (under whatever name) and heterosexuality. The Sonnets present a male-male love that, like the love of the Greeks, is set firmly within a structure of institutionalized social relations that are carried out via women ... (Sedgwick, 1985, 35, underline mine)

2. *The Sun* as a Homosocial Story

(1) homosocial community の物語としての *The Sun*

この物語が男たちの homosocial な世界を語っている事は、登場人物の community への姿勢から見ると明らかだ。ミピポポラス伯爵を “One of us” (Hemingway, 2003, 67) と言い、Jake に “You are the only person I’ve got” (Hemingway, 2003, 185) と言い、結末で婚約者 Mike について “He’s my sort of things” (Hemingway, 2003, 247) と言うなど、Brett Ashley は「自分の」community を公言し続ける。

一方で、男たちの口から「自分の」community という言明はなされない。しかし彼らが結びついている事実は、彼らによって言い表されている。一つは Circe と swine を持ち出す Robert Cohn の例えである。Circe はギリシア神話、ホメロスの『オデュッセイア』に登場し、主人公オデュッセウスを自分の島に閉じ込め部下たちを豚に変える魔女である。

“He [Cohn] calls her [Brett] Circe,” Mike said. “He claims she turns men into swine. Damn good. ... (Hemingway, 2003, 148)

もう一つは、サン・フェルミンの祝祭でリャウリャウの踊り手たちが Brett を取り囲み踊りだす場面を語る、Jake の描写である。

Some dancers formed a circle around Brett and started to dance. . . . They took Bill and me by the

¹ 石川県立大学 生物資源環境学部 教養教育センター
責任著者：田村 恵理 (eritamu@ishikawa-pu.ac.jp)

arms and put us in the circle. Bill started to dance, too. . . . Brett wanted to dance but they did not want her to. They wanted her as an image to dance around. (Hemingway, 2003, 159, underline mine)

二つに共通しているのが「Brettを中心とした男たちの結びつき」である。

これら男たちの概念が Brett のいう「私の」community と同一ではない点は、Jake の例えから明らかだ。Jake の描写のなかで、Brett はメンバーとの融合を許されない¹⁾。また、Cohn によるキルケの例えと Jake による「とりまいて踊る像」の描写も重ならない。この物語は Jake の一人称語りによるもので、Wagner-Martin が述べるように、Jake が登場人物の行動に承認をくだす存在である (1987, 8)。Cohn はここにおいて承認を与えられることはないのだから、Cohn の例えも勿論 Jake の承認を得ないだろう。二つの描写の差異は、community の中心に対する理解にある。Jake が Brett という中心の孤立性を強調する一方で、Cohn には彼女の孤立性は意識されない。Cohn がこの物語の community からつまはじきにされるのは、こういった彼の homosocial community の捉え方に関係があるのかもしれない。こう考えると、Jake の語る homosocial な community には、二種類の外部者があるのだ。community の輪自体から外される Cohn と、輪の中心として疎外される Brett である。

(2) *The Sun* の語り形式にみられる homosociality

この物語はテーマだけでなく語り方自体も、homosocial な特徴を持つ。Sedgwick は homosocial な絆の二つの特徴として女性嫌悪と同性愛嫌悪をあげるが、この双方が見られるのだ。女性嫌悪的な特徴から見てみると、女の支配的姿勢に対する危機感が示される。Frances Clyne が Cohn を一方的に責め立てる場面 (Hemingway, 2003, 56) には、彼女の Cohn への支配に対して抱かれた「Jake の」嫌悪感が見られる。Brett による支配にも Jake は意識的である。彼女のホテルの部屋の様子を、「いつも召使を使っている人だけがする乱雑の状態だった」(Hemingway, 2003, 245) と述べていることから明らかだ。

Jake は、Brett の支配的振舞いの不当性を示すかのように、彼女にいかなる力も認めない。Wylder (1995), Martin (1987), O'Sullivan (1988) のように、Brett を「新しい女」として彼女のフェミニスト的側面を強調する見方もあるが、ファッション的な革新性と性的解放性を除けば、Brett にフェミニスト的資質は見られない。彼女は経済的な自立には程遠

く、Jake の言うように「一人ではどこへも行けない」(Hemingway, 2003, 107)。男性中心的な社会の改革者にしては、従来の制度に疑問の目を向けているようにも見えない。借り物の Lady の称号を「時にはとても役に立つ」といって利用するのである (Hemingway, 2003, 64)²⁾。Nagel (1995, 20) は、Martin (1987) の論における New Woman という用語の扱い方を批判しているが、この指摘は重要だ。アメリカにおいて 19 世紀末～20 世紀初頭の期間に出現し、女性参政権の獲得を主要目的としたフェミニスト的要素の強い New Woman と、広い意味でいう「新しい女」の一種として 1920 年代に登場したフラッパーとは、その政治的関心に違いが見られるからだ。有賀、大下によれば、「フラッパーたちには女性の経済的自立とか政治的地位の向上を目指すフェミニズムは堅苦しくみえた」(2000, 235-6) ようだ。Brett の描写にはフラッパーのイメージが重なり、彼女を広い意味での「新しい女」とする事はともかく、フェミニストとして捉えることには疑問が残る。

Jake の語り口に Brett への嫌悪感が読まれる可能性については、Wagner-Martin (1987, 4-5) もふれる。O'Sullivan (1988) は Jake と Brett との関係に対等な friendship の可能性を見出すが、Brett を含めた女の支配に向ける Jake の嫌悪感を考えれば、少なくとも彼の側からそのような friendship が想像されているとは思えない。こういった支配の脅威は階級的な次元の問題であり、これが意識される以上、この関係に対等さを主張する事は不可能だからだ。例えば、Jake は自分の語る homosocial な世界から outsider として追い出す Cohn に対してでさえ、支配の脅威を感じることはない。ここからこの物語においては、Jake と Brett との間というよりむしろ、Jake と Cohn との間の方がまだ friendship が生まれる可能性が残されている印象がある。

homosexual の集団に敵意を示すなど、Jake の語りにも同性愛嫌悪を見出すのは容易である。友人 Bill も Jake に「僕は世界中のだれよりも君が好きなんだ。ニューヨークでは、君にそんなこと言えなかったんだ。ぼくが男色だっていうことになるからね。」(Hemingway, 2003, 121) と言うが、Moddelmog が言うように、ここでは確かに Bill が「homosocial と homosexual の欲望および行為を区別する境界線の不安定性に気づいて」(1999, 97) いる事が感じられる。また、それがゆえに homosocial な community の存続のためには、そこにおける sexual な欲望の存在について表向き上否定しておく必要性を、Bill が意識しているとも読めるのではないか。

3. Jake's Dis/respectable Emotion for Writing

(1) 劣った芸術としてのwriting

ここからは書く行為にまつわる Jake の情熱を検証し、それが Sedgwick (1985) の提唱する homosocial な erotic triangle と重なることを明らかにしたい。その為この物語に見られる芸術感を考える事から始めよう。

Hemingway は *Death in the Afternoon* と *Dangerous Summer* において、闘牛と執筆を芸術の一形式同士として重ねている。*The Sun* においては、その二つの芸術形式に明らかな優劣がつけられているのが分かる。Stanton (1989, 51) が指摘するように、闘牛士が作家に比べて特殊な位置に祭られているのは明白だ³⁾。作家の Bill は、Romero の闘牛を観た後食堂で彼を紹介されると、Jake に向かって「書くことなんかくだらないと思っているって、そいつに言え」「おれが作家なのを恥じていると言ってくれ」(Hemingway, 2003, 179) と言うのである。Brett との結びつきにおいて、Cohn や Jake ら書き手とは対照的に、闘牛士 Romero だけが打ち負かされた姿勢を見せない事にも、その点は感じられる。実は、この優劣の関係性は *Death in the Afternoon* においてもわずかにではあるが見られる。闘牛の素晴らしさをそんなにも力説するなら「あなた自身が闘牛士じゃないのはどうなのかしら」と問われた作家である語り手は、自分がなれるものか試してみたがうまくいかなかったと答えているのだ (Hemingway, 1999, 137)。よって、おそらく闘牛より書く行為の方が芸術として劣っているとみなす認識は、Hemingway 自身の芸術に関する認識の現れと考えても差し支えないだろう。

(2) 語り得ない情熱の至高性

そもそも、Jake にとって語る行為自体は何かの価値をそぐ尊敬に値しないもの (disrespectable なもの) として認識されている。Romero との別れのいきさつを語ろうとする Brett を、Jake が「話すとお台無しになるよ」と諷める場面 (Hemingway, 2003, 249) は印象的である⁴⁾。また、この物語におけるフランスとスペインの対照は、フランスの表す物質主義に背を向ける Jake の姿勢の現われと理解されることが多い。確かに、経済的次元で何事も片付いてしまうフランスの人々のシンプルな特質と、経済的次元とは別の価値観を秘めたスペインの人々の複雑性は *The Sun* において対置されている。しかし、これを語りうる領域と語りえない領域との対置と読み、語りえない領域スペインへの Jake の魅了を示すという解釈もまた可能ではないか。二つの国の国境で以下のように考えながら、Jake は一人の休息の場をス

ペインに求める。

I hated to leave France. Life was so simple in France. I felt I was a fool to be going back into Spain. In Spain you could not tell about anything. (Hemingway, 2003, 237, underline mine)

この下線部の文章はスペインでは「何もわからない」と取れると同時に、「何についても語ることはできない」と取る事も可能だろう。

闘牛は、そういった語り行為の限界を超える。彼は Romero の闘牛を、スペインでは「本当の emotion を与えた」(Hemingway, 2003, 171) とうっとりと賞賛する。ここから、Jake の芸術観において「語りえない情熱」に価値が与えられる事がわかる。未出版部分の草稿から、*The Sun* の物語自体が Jake 自身の書きあげた小説だという事実が分かるのだが、それならば Jake の芸術作品でもあるこの物語に「語られない彼の情熱」を探ることが重要な意味を持つだろう。

(3) *The Sun* の語りに現れる erotic triangle

語る行為の価値の低さを認める一方で、Jake は語りた衝動にかられる。祝祭のあいだだけに起こる特別な感情について彼は、「それが静かなものであっても、聞こえるように何か大声で言わなければならないような感情」(Hemingway, 2003, 158) と説明する。この Jake の叫びへの衝動は、語りを通じた表現にみせる彼の執着を示すようだ。Jake は語りえないものを崇めながらも、その表現手段として書くという語り行為にこだわる。この行為が尊敬に値しないと十分認識しながら。つまり Jake の書く行為にまつわる情熱には、respectable なもの (尊敬すべきもの) に対する情熱と disrespectful なもの (尊敬に値しないもの) に対する情熱が同時に存在する。この情熱の構造は、Sedgwick が Shakespeare のソネット集を分析する際に持ち出す erotic triangle と重なる (図 1 参照)。Sedgwick は、ソネット集の語り手の男と fair な若者 (以下便宜上「美青年」とする) と dark lady (以下「黒い女」とする) という三人の間の関係に注目する。そして Sedgwick は美青年を respectable な者として黒い女を disrespectful な者としてそれぞれ認識しつつ、語り手の男が二人の男女に同時に向ける情熱を浮き上がらせているのである。

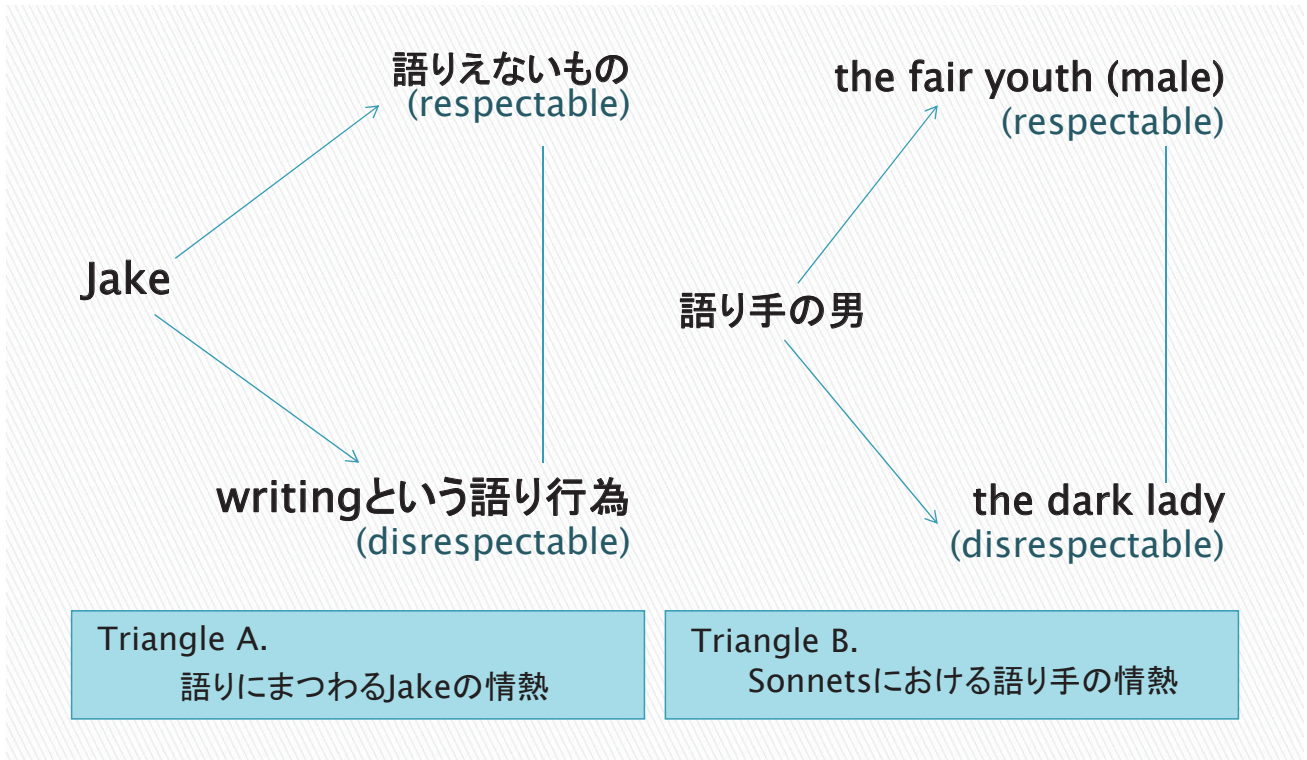


図1 ふたつのtriangle (1)

4. From Two Emotions to One

ここからは、*The Sun* において語り手 Jake が二人の男女に向ける「語りえない」情熱に注目してそこにも homosocial な erotic triangle の存在を確認し、それを重ねて考える事で、Jake の持つ言語表象行為にまつわる情熱の構造を再考したい。Jake は Brett と Romero に同時に情熱を向けており、Brett への情熱が disrespecktable なものとして、Romero への情熱が respectable なものとして描かれている。

(1) respectable Romero, disrespecktable Brett

Jake はとにかく Brett の disrespecktable を並べ挙げる。Baskett (1991, 106-107) や Cohen (1991, 158) が指摘するように、Brett の人物描写の複雑さは神秘的ですらある。この複雑さは、彼女が極端に一貫性を欠く人物として語られる事から生み出されている。sadistic でありながら被害妄想的、依存的でありながら支配的。更に Brett は、自分の息子の世話を放棄している可能性がある一方で、時に周囲の男に母のように振舞うという意味でも一貫性の無さを示している。*The Sun* の未出版部分の草稿 (Hemingway, 1979) に彼女には一人、息子がいることが語られているし、Fleming によれば、初期の草稿には、Brett に父方の祖父母にひきとられた息子が一人イングランドにいますとまで書かれているようだ (Fleming, 1995, 164-65)。そんな一貫性のない彼女を、Jake が disrespecktable な者と意識している事がわかる印象的な場面がある。

She was smoking a cigarette and flicking the ashes on the rug. She saw me notice it. “I say, Jake, I don’t want to ruin your rugs. Can you give a chap an ash-tray?” (Hemingway, 2003, 64)

Jake の向けるまなざしにひるむ Brett の反応から、このまなざしが disrespecktable な性質を持つ事は明らかだ。一方、Jake の語りは Romero の respectability を並べ挙げる。ほとんど全ての登場人物が彼の姿の美しさや闘牛の技、生き方に魅了される。彼の人物描写の完全無欠性については、Meyerson (1995, 5-6), Cohen (1991, 162), Stanton (1989) ら多数指摘があり、Stanton (1989, 53) は Romero の描写の過度な理想化こそが *The Sun* の弱点であるとまで言う。この Brett と Romero の描写の対照性も再び、Sedgwick のソネット集分析における erotic triangle と重なる (図2 参照)。Sedgwick (1985, 41) はソネット集の詩学を、「青年を道徳的に一貫した人物として描くためならいくらかでもスペースを割く一方で、黒い女の方は初めから、二重人格の不実な人間として定義されているように思える」と分析しているのだ。

(2) Jake の情熱にみられる二重の homosocial triangle

しかし、Brett と Romero とに向ける Jake の二方向の情熱が両方とも、彼の芸術感において崇高とされた「語りえないもの」として存在する事は興味深い。

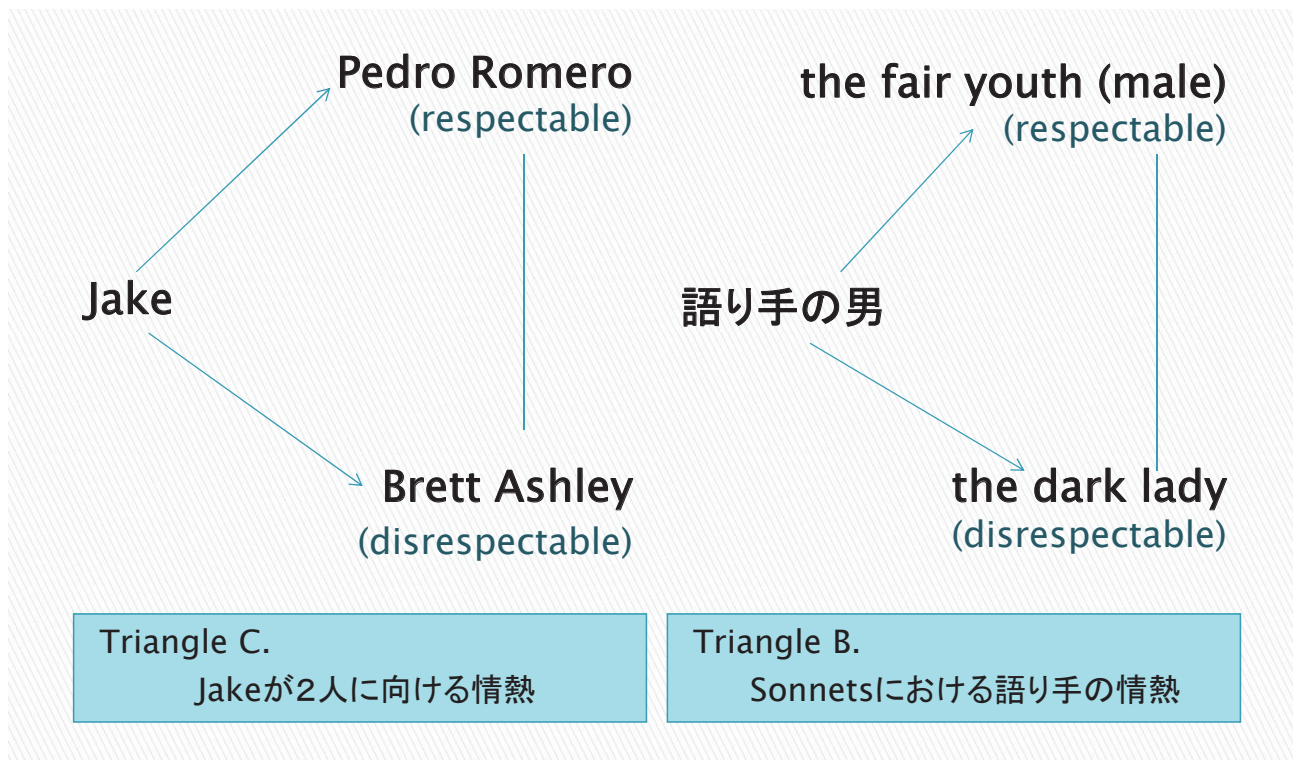


図2 ふたつの triangle (2)

Brettに向けられる情熱については、語りの女性嫌悪的特徴が原因でその「根拠が」語られない。Jakeは彼女を *disrespectable* な者として貶めながら、彼女が自分の目の前から去ると、食堂のテーブルにつきながら「六人ぐらいの仲間が欠けているように思われた」(Hemingway, 2003, 228) とその寂寥感を語る。ある意味では Jake は Brett に向けた「反感に満ちた情熱」を語っているのだ。この情熱は Cohn やミピポポラス伯爵が Brett を語る際に用いる、相手を崇高化するいわゆる「romantic な愛の描写」とは異なり、そのような描写に慣れた読み手からすれば、随分唐突なものに感じられるだろう。

一方 Jake が Romero に向ける感情は、目立たないようにされる。Romero が Jake を魅了するべき裏づけは、romantic な愛の描写を思わせる調子で並べあげられるのにも関わらずである。Brett との別れにより、Romero が自分のテリトリーからも去った事実を認識しても、Jake は Romero の不在に対する寂寥感を語らない。しかし Jake の Romero に対する情熱の強さは明らかだ。食堂で Romero と会話する彼は Brett の事などすっかり忘れてしまい、Brett にたしなめられる。

“I say, Jake,” Brett called from the next table, “you have *deserted* us.”

“Just temporarily,” I said. “We are talking bulls.”

“You *are superior*.” (Hemingway, 2003, 179)

ここで “You *are superior*.” という Brett の言葉は、Jake から Romero に向かう情熱の強さが、Jake から彼女に向かう情熱の強さに勝る事を感じ取っている可能性をもにおわせる。

Brett への情熱を誇示する割に、Romero に対する情熱を目立たせないようにする Jake の努力には、homosocial な絆に見られる同性愛嫌悪が潜んでいる。事実 Jake と Romero の間には男同士の連帯が感じられ、これは Brett を介して Jake と Romero との間に交わされる無言のコミュニケーションにおいて強調される。言葉に表せない情熱を崇高とするこの物語の性質を考えると、ここでのやりとりが重要な意味をもつ事は明らかだ。

I tapped with my finger-tips on the table. Romero saw it. He shook his head.

...

I stood up. Romero rose, too.

“Sit down,” I said. “I must go and find our friends and bring them here.”

He looked at me. It was a final look to ask if it were understood. It was understood all right. (Hemingway, 2003, 189-90, underlines mine)

ここで言いたいのは、Jake が二人の男女に対して向ける情熱のどちらが重要であるかという問題では無い。Jake の持つ情熱が、同時に二方向に向けられ

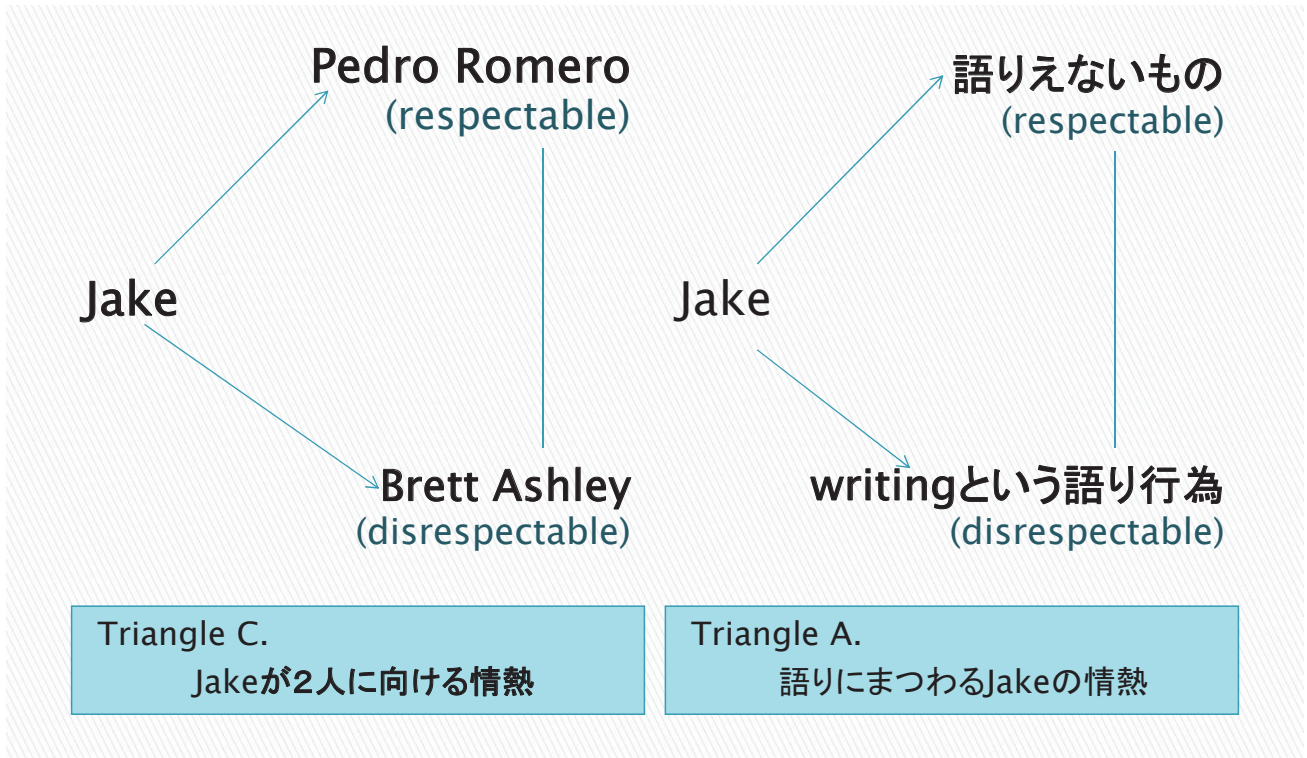


図3 ふたつのtriangle (3)

てこそ成立するという事実である。その証拠に、結末で Romero がこの三角関係から離脱する時、Jake の Brett に対する情熱も変化をみせる⁵⁾。このように Jake が二人の男女に抱く情熱にも、彼の書く行為に対する情熱と同様の、erotic triangle をはらむ homosocial な性質が確認できるのだ。

ここで、Jake に見られる二つの情熱の三角構造が重なり合った。つまり、「Jake が二人の男女に抱く情熱の三角構造」と「Jake の書くという行為にまつわる情熱の三角構造」の重なりである。この重なりを基に前者から後者を再考したい。respectable な Romero と disrespeccable な Brett とに同時に向けられる Jake の二つの情熱は、ここにおいて分離した別個の情熱ではなく一つの情熱であった事が分かる。Brett と Romero が共に両性具有的な存在として示され、その描写のジェンダー的な位置づけにおいて二人が近接するからだ。Spilka (1987) や Cohen (1991) のように Romero に究極の男性性を読む分析もある⁶⁾。しかし、Brett の容姿の描写においていわゆる「男性的な」要素が強調されるのと同様、谷本 (1999, 146) の指摘のように Romero の容姿の描写にもいわゆる「女性的な」要素が強調されており、その意味で彼の sexuality を「登場人物の中で最も男性的」と断定してしまうのは危険である事は忘れてはならない。Romero の闘牛の衣装に女性的な服装倒錯を見出す Schwartz (1984, 64-66) のような批評もある。

(2) 2つの情熱の融合

Hemingway は Jake から Brett に向かう一見 heterosexual な情熱を disrespeccable に、Jake から Romero に向かう一見 homosocial な情熱を respectable に描いた(図3 Triangle C.参照)。ここでいう homosocial な情熱は勿論、Sedgwick の姿勢にならぬ、sexual な要素を含む情熱との連続性を秘めたものという意味で使っている。この描写により、Hemingway は異なる対象に同時に向ける一人の男の情熱を二項対立的に位置づけ、更に homosocial な情熱の方に重要性を与えているように見える。しかし、Hemingway は、Jake の情熱が向かう先の男女二人のジェンダー的な位置づけを近づけ、更に Jake の立ち位置を homosexuality を嫌悪する性的不能者の男性として設定する事で、Jake の二つの情熱が、どちらも性器接触の達成を前提としないで生じるものとして提示した。つまり Jake は Brett と Romero のどちらも性器接触の達成は不可能だという認識の前提をふまえて二人に情熱を向けているのである。その事により、Jake という男の情熱は、二つの対立的な指向性をはらむ三角構造のように見えた当初のかたちから、より曖昧なかたちに変化する。ここで彼に見られた男女それぞれに対する二つの個別の情熱は、区別のあいまいな一つの情熱として認識し直される事になるからだ。

このような Jake の情熱の様相を考えると、彼の書く行為にまつわる情熱も、構造化を拒む様相を持つ

事が想像できる。書く行為を *disrespectable* な芸術と認めながら、それを使って *respectable* な語りえないものへの情熱を昇華させようとする Jake の姿。これは、対立するように見えた二種類の情熱が融合したひとつの情熱を示している (図3 Triangle A. 参照)。と同時に、この姿は書くという表象行為に対する脱構築的な挑戦の姿勢を示しているともいえる。この作品の草稿の初期段階では Jake は Hem (imgway) という名だったことを考えると (Balassi, 1995, 109), Jake の書く事に示すこの姿勢は Hemingway のそれに重なってくるのだろう。

5. むすび

本論ではまず, Sedgwick によるソネット集解釈における語り手の情熱の三角構造を重ねる事で, Jake の書く事にまつわる情熱の構造を浮かび上がらせた。それを今度は Jake の示す *gender-sexual* な次元での情熱の三角構造に重ねて考察し, 彼の書く事にまつわる情熱の構造が, 一見対立する二つの感情を包括した一つの情熱としてある事を示した。三角構造に依拠する事から始め, 最終的にはその三角構造を否定した為, 本論もある意味脱構築的な姿勢をとったといえるかもしれない。

付記

本稿は, 日本英文学会第83回全国大会 (2011年5月21日, 北九州大学北方キャンパス開催) における研究発表を元に加筆修正したものである。

注釈

- 1) それにも関わらず, Brett が「私たちの」community を Jake に向かって主張する場面は, 彼女自身が男の *homosocial* な community の中でメンバーと認められていない事に気づいていない事を際立たせている。
- 2) Martin (1987) は Brett がこの爵位に不満をもってると解釈するが, 筆者にはそこまでの意図を汲み取る事はできていない。
- 3) この物語を構成する主要な男の芸術家を観ると, 闘牛士は Romero 一人なのに対して, 書き手は Jake, Bill, Cohn と三人もいるというアンバランスさがある。これは, 一方で一人の闘牛士が三人の書き手に勝るとも言わんばかりのようにも見え, もう一方で Hemingway の書くことに見せる執着を示しているようにも見える。
- 4) 実は, Jake のこの言葉の後に Brett は「そのまわりを話しているだけよ」(Hemingway, 2003, 249) と続ける。彼女も「話す」と台無しになることを認めているのである。ここで興味深いのは, Hemingway の書くことに対する情熱を Brett もある程度共有している点である。こういった意味で, Jake と Brett という男女のカップルの

関係は, その *friendship* の可能性という点においてとても複雑で神秘的なものとして描かれていることがわかる。そこにこそ, *gender-sexuality* の観点から見た際のこの作品の魅力を見つけられるのかもしれない。

- 5) Vopat (1987, 94) は, Jake の Brett に対する情熱の変化を, Jake の San Sebastian への一人旅の時点に置くが, 筆者は Brett と Romero との別れを Jake が知る時点に置く。
- 6) この傾向はこの物語を *moral* の観点から捉えようとする論に多いようだ。そして *androgyny* をテーマとした研究のなかで, Spilka (1982) が Brett の両性具有性を論じながらも Romero の示す両性具有性に着目しない事は不自然といわざるを得ない。

引用文献

- 有賀貞・大下尚一. 2000. 新版概説アメリカ史—ニューワールドの夢と現実. 有斐閣選書.
- Balassi, W. 1995. The Writing of the Manuscript of *The Sun Also Rises*, with a Chart of Its Session-by Session Development. In Nagel, J (ed.). 1995. *Critical Essays on Ernest Hemingway's The Sun Also Rises*. G. K. Hall & Co. 106-125.
- Baskett, SS. 1991. Brett and Her Lovers. In Bloom, H (ed.). 1991. *Major Literary Characters: Brett Ashley*. Chelsea House Publishers. 105-122.
- Cohen, MA. 1991. Circe and Her Swine. In Bloom, H (ed.). 1991. *Major Literary Characters: Brett Ashley*. Chelsea House Publishers. 157-65.
- Fleming, RE. 1995. Second Thoughts: Hemingway's Postscript to *The Sun Also Rises*. In Nagel, J (ed.). 1995. *Critical Essays on Ernest Hemingway's The Sun Also Rises*. G. K. Hall & Co. 163-69.
- Hemingway, E. 1999. *Death in the Afternoon*. Scribner.
- Hemingway, E. 2003. *The Sun Also Rises*. Scribner.
- Hemingway, E. 1979. The Unpublished Opening of *The Sun Also Rises*. In Antaeus. 1979. 33(2). 7-14.
- Martin, W. 1987. Brett Ashley as New Woman in *The Sun Also Rises*. In Wagner-Martin, L (ed.). 1987. *New Essays on The Sun Also Rises*. Cambridge UP. 65-82.
- Meyerson, RE. 1995. Why Robert Cohn?: An Analysis of Hemingway's *The Sun Also Rises*. In Nagel, J (ed.). 1995. *Critical Essays on Ernest Hemingway's The Sun Also Rises*. G. K. Hall & Co. 95-105.
- Moddelmog, DA. 1999. *Reading Desire: In Pursuit of Ernest Hemingway*. Cornell UP.
- Nagel, J. 1995. Introduction. In Nagel, J (ed.). 1995. *Critical Essays on Ernest Hemingway's The Sun Also Rises*. G. K. Hall & Co. 1-31.
- O'Sullivan, S. 1988. *Love and Friendship/ Man and Woman*

- in *The Sun Also Rises*. In *Arizona Quarterly*. 1988. 44(2). 76-97.
- Schwartz, N. 1984. Lovers' Discourse in *The Sun Also Rises*: A Cock and Bull Story. In *Criticism*. 1984. 26(1). 49-69.
- Sedgwick, EK. 1985. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. Columbia UP.
- Spilka, M. 1987. The Death of Love in *The Sun Also Rises*. In Bloom, H (ed.). 1987. *Modern Critical Interpretations: The Sun Also Rises*. Chelsea House Publishers. 25-37.
- Spilka, M. 1982. Hemingway and Fauntleroy: An Androgynous Pursuit. In Fleischmann, F (ed.). *American Novelists Revisited: Essays in Feminist Criticism*. G. K. Hall & Co. 339-70.
- Stanton, EF. 1989. *Hemingway and Spain: A Pursuit*. U of Washington P.
- 谷本千雅子. 1999. 同性愛と女の性的快樂—『日はまた昇る』のブレットと『エデンの園』のキャサリン. 日本ヘミングウェイ協会 編著. *ヘミングウェイを横断する—テキストの変貌*. 本の友社. 138-153.
- Vopat, CG. 1987. The End of *The Sun Also Rises*: A New Beginning. In Bloom H (ed.). 1987. *Modern Critical Interpretations: The Sun Also Rises*. Chelsea House Publishers. 91-101.
- Wager-Martin, L. 1987. Introduction. In Wagner-Martin, L (ed.). 1987. *New Essays on The Sun Also Rises*. Cambridge UP. 1-18.
- Wylder, DE. 1995. The Two Faces of Brett: The Role of the New Woman in *The Sun Also Rises*. In Nagel, J (ed.). 1995. *Critical Essays on Ernest Hemingway's The Sun Also Rises*. G. K. Hall & Co. 89-94.

Writing and Respectability in Ernest Hemingway's *The Sun Also Rises*

: From the Perspective of its Narration's Homosociality

Eri TAMURA (Liberal Arts Education Center, Ishikawa Prefectural University)

Abstract

This study explores Ernest Hemingway's approach to writing in *The Sun Also Rises* through the lens of homosocial desire as conceptualized by Eve Kosofsky Sedgwick. Firstly, it is pointed out that some distinctive features of the homosocial community can be seen both in the relationship between the characters and the narrative style in the novel. Then, it is suggested that the homosocial triangle shown by Sedgwick can also be seen in the emotion of the novel's protagonist, Jake Barnes, and this story shows a writer's emotion for expressing the indescribable passion, the respectable, by the art of writing, the disrespectful. Finally, the analysis examines Jake's triangular emotional connection to writing by paralleling it with his triangular affection for both male and female characters.

Keywords: Ernest Hemingway, Eve Kosofsky Sedgwick, homosocial, *The Sun Also Rises*